

近世城下町の形成過程

—地割からみた小牧城下町の成立をめぐって—

鈴木正貴

尾張の中世集落は屋敷の集合体として成立し、その構造は町場の取り込み方によって変遷している。そして、初めて長方形街区に短冊型地割の町屋が展開した小牧城下町は、近世城下町の嚆矢として位置付けられる。この小牧城下町に先立つ周辺の一般集落遺跡や町場を含む都市遺跡の地割を検討した結果、小牧城下町と地割が完全に一致する事例は発見されなかった。しかし、概略方格地割に土地を区分して屋敷を配置する形と、街道や岸に沿って線的に広がる町場との設置原理の異なるものを組み合わせたものであった可能性を指摘できた。これは、織田信長が武家を中心とする集落内部に構造を伴う形で町場を取り込んだものと考えられ、居館—武家屋敷—町場を一元的に掌握する構造に転換するため、旧来からある要素をその場で組み合わせてできたものが小牧城下町ではないかと推定した。

1. はじめに

愛知県小牧市に所在する小牧山城は、永禄9年(1563)に織田信長により築城された。標高85.9mの独立丘陵である小牧山の山頂に石垣を全周させた主郭を置き、これを中心に複数の曲輪を配置した城郭である。山麓には堀で囲まれた武家屋敷が地形に沿う形で弧状に配され、南側に広がる平坦な洪積台地上には広大な城下町が建設された(中嶋2008)。この城下町は、複数の街路を縦横に設定して長方形街区を形成し、その中に短冊型地割の町屋を展開させたもので、近世城下町の初源的なものとして高く評価されている(千田1989)。これまでの尾張地域には見られない町の形が小牧に突然出現しており、その城下町が成立した背景が大きな問題となっている。筆者は最近、愛知県の中世集落の成立とその変遷を概観して都市の形成過程を推論したことがあり(鈴木2017a)、本稿ではこの成果を特に地割の規模に着目して再検討することで小牧城下町の成立過程を考察する。

2. 愛知県における集落遺跡の動向

(1) 縄文時代から奈良時代の集落遺跡

愛知県下の縄文時代から平安時代までの集落

遺跡では、建物遺構は竪穴建物を主体として掘立柱建物が伴う形で構成されている。古代で寺院や官衙遺跡に大陸から伝来した礎石建物がみられるものの、奈良時代までは竪穴建物が圧倒的多数を占めていた。建物は一定の範囲に分布しており、集落外部とは隔絶した状態となる。弥生時代の環濠集落のように居住域外縁部を濠で圍繞する事例があり、外側には墓域や生産域などが展開した。一方、集落内部は清須市朝日遺跡など一部の大規模集落を除き、溝などの遺構で区画する事例は少なく、建物は環状に分布するなど偏在する場合はあるものの、基本的には等質に分布する傾向が確認される。豊田市梅坪遺跡など大形建物など特定の遺構が偏在する事例は存在するが、これが広く一般的に拡散する状況には至っていない。

(2) 鎌倉時代以降の集落遺跡

平安時代の集落遺跡は事例が少なく、溝で画された区域に建物が分布する形が現れ始めるようであるが、本格的に集落遺跡の形状が変化するののは、豊川市宮沢遺跡や豊田市天神前遺跡などが登場する12世紀中葉(山茶碗第4型式期)を待たなければならない。多くの遺跡で掘立柱建物と井戸が確認されるのは山茶碗第5型式期(12世紀後葉)頃で竪穴建物を伴う事例は激減し、その後に区画溝が設けられ内部に建物や井戸などが配置される。幅が1~2mの区画溝は山茶碗第7型式の山茶碗を最新資料とするもの

が多く 13 世紀中葉に、幅が 3m を超える堀は古瀬戸末期から大窯第 1 段階の瀬戸・美濃窯産陶器を最新資料とするものが多く 15 世紀後葉に、それぞれ位置付けられるが、集落内部で出土する遺物や建物遺構を詳細に分析すると、溝や堀よりも古い時期から集落遺跡が機能していたことが判明する場合があります、12 世紀代から区画が存在した可能性が高いとみられる（鈴木 2015・鈴木 2016a）。

このように溝などの圍繞施設で画された空間内に建物や井戸が展開する遺構群を「屋敷」とみることができ、この屋敷が集積する集落形態は古代以前の竪穴建物が中心に展開する集落構造とは大きく異なっている。そして、屋敷は最小単位の人々の集まり（単位集団：現代的に言えば家族に相当すると思われる）が生活の拠点にした場であったと想定され、単位集団（家族）が集落内で一定の領域を占有して居住する形態が誕生したことを意味するといえる。

3. 屋敷の分類

（1）屋敷の分類

12 世紀から成立する屋敷は、敷地の形状と規模、区画施設の形状と規模、内部構造の組合せなどから分類が可能である（図 1）。

集落内を複数の屋敷に区分するとき、その境界が直線的か非直線的かどうかは別として、区画施設は縦横に交差することが多いため、区画の形状は概略方形または長方形となる。したがって、敷地の形状と規模は、一辺が 100m 以上の規模を持つ方形となるもの（1 類）、一辺が 100m 以下の大きさで方形となるもの（2 類）、奥行きが間口の 2 倍以上の長方形となるもの（3 類）に大別できる。一方、区画施設は、幅 3m 以上で深さ 1m 以上の堀で直線的に囲まれたもの（A 類）、幅 3m 以下または深さ 1m 以下の溝で直線的に囲まれたもの（B 類）、小規模な溝で地形などに即して非直線的に囲まれたもの（C 類）、掘立柱柵列などで圍繞されたものまたは区画施設が明瞭に確認できないもの（D 類）に分類できる。また、屋敷内部の建物構成は、礎石建物や大形掘立柱建物を中心に複数の建物で構成されるもの（ア類）、大形掘立

柱建物などが単数存在するもの（イ類）、小形から中形の掘立柱建物を中心に複数の建物で構成されるもの（ウ類）、小形から中形の掘立柱建物が単数存在するもの（エ類）に区分できる。

（2）居館【屋敷 1 類】

一辺が 100m 以上の規模を持つ方形となる屋敷 1 類は、大規模な堀で直線的に囲まれたもの（1 A 類）が大半を占め、これらは 15 世紀後葉以降に拠点的な城館遺跡（館城）などに事例がある。織田信雄による改修以前のいわゆる前期清須城居館（清洲城下町遺跡）や岩倉城居館（岩倉城遺跡）は一辺が 200m 前後に及ぶ巨大な屋敷 1 A 類といえる。内部構造が明瞭に判明した事例はないが、大形建物など複数の建物が存在したものと推測される。屋敷 1 A 類は刈谷市中条遺跡などのように中世前期にも認められる。一方、小規模な溝で直線的に囲まれた巨大な方形屋敷となる 1 B 類は、愛知県内では明瞭な形で発見されたものは存在しない。しかし、豊川市宮沢遺跡などのように小規模な区画溝に大型掘立柱建物が展開する事例があり、その一部がこのタイプに属する可能性は考えられる。

（3）一般的な屋敷【屋敷 2 類】

一辺が 100m 以下の大きさで方形となる屋敷 2 類は、大規模な堀で直線的に囲まれたもの（2 A 類）と小規模な溝で直線的に囲まれたもの（2 B 類）、非直線的な溝で囲まれたもの（2 C 類）、掘立柱柵列などの施設または区画施設が明瞭に確認できないもの（2 D 類）に区分できる。屋敷 2 A 類は一宮市大毛池田遺跡や豊川市牧野城跡など 15 世紀後葉以降の城館遺跡で確認され、前期清須城（清洲城下町遺跡）のように屋敷 2 A 類が基盤目状に配置される場合もある。豊橋市公文遺跡のように 13 世紀に遡る事例も存在する。屋敷 2 B 類は東海市弥勒寺跡などの事例があるが、類例は少ない。寺院など特殊な遺跡が多いように感じられる。

一方、非直線的な溝で囲まれた屋敷 2 C 類は、愛知県下で確認される屋敷では最も多いタイプである。区画溝が蛇行する主な要因は屋敷が立地する地形と考えられる。蛇行する流路に沿う地割となる下津北山遺跡、集落の中央を蛇行して流れる大溝に大きく規制された豊田市郷

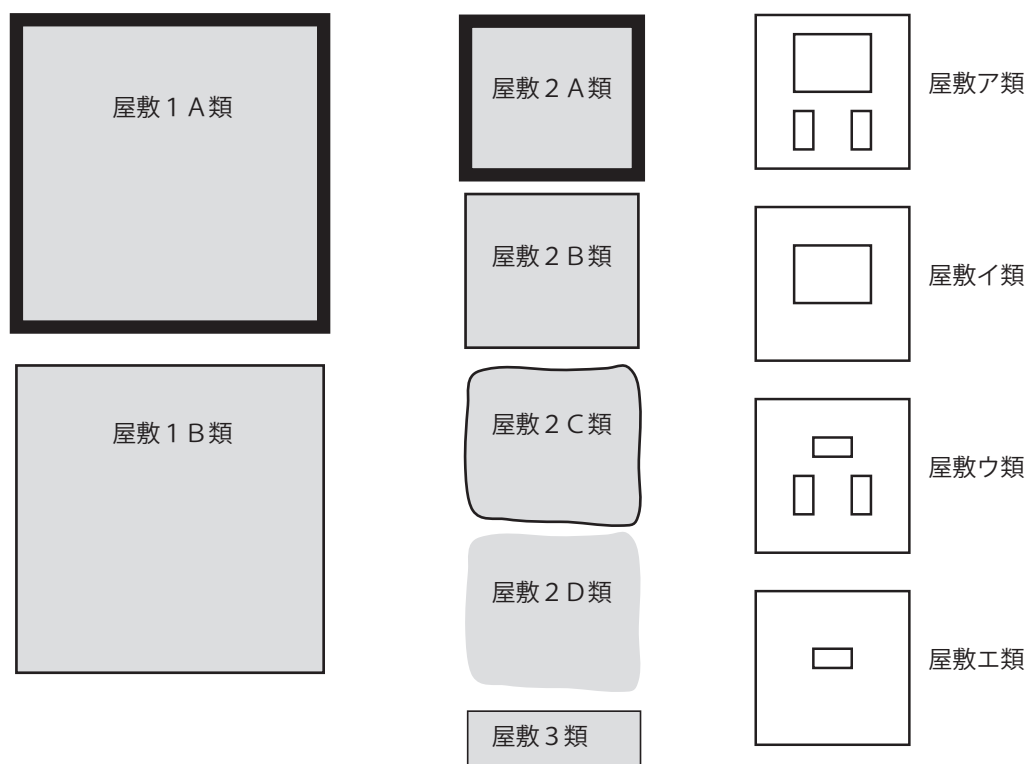


図1 屋敷の分類模式図(鈴木2017aを改変)

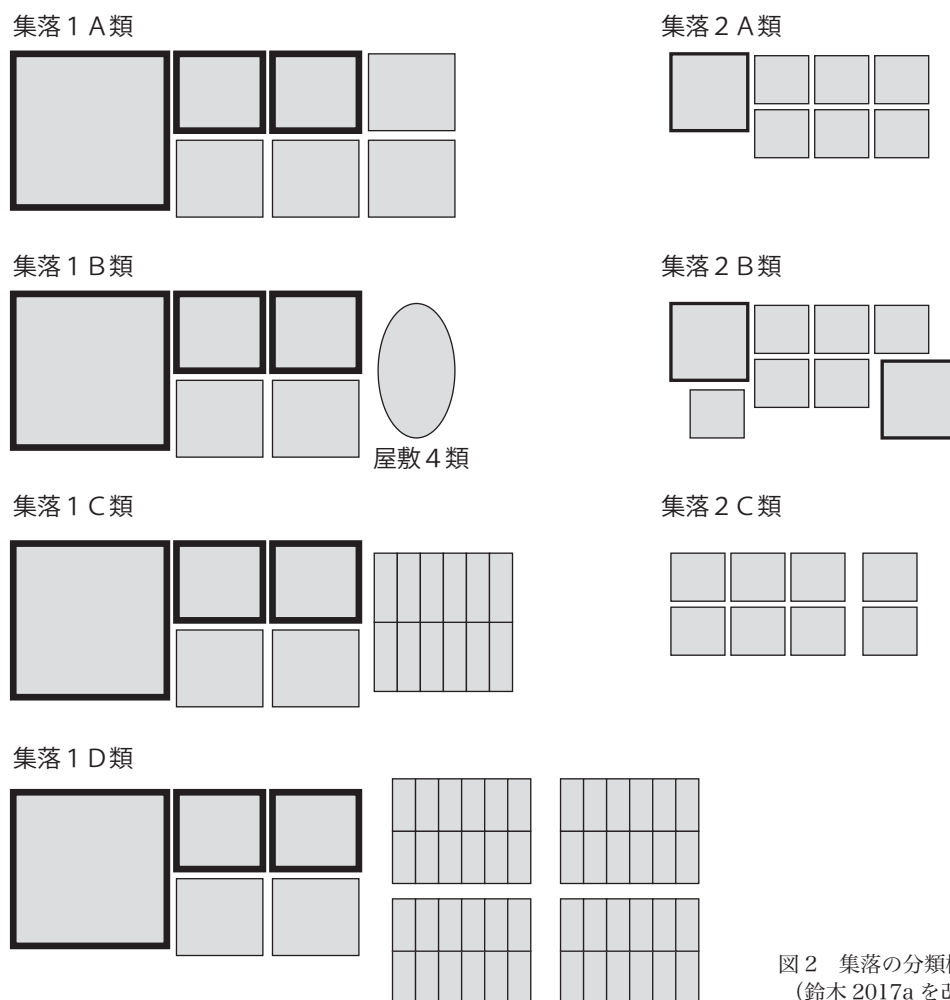


図2 集落の分類模式図
(鈴木2017aを改変)

上遺跡、丘陵頂部の平坦面にある微地形の凹部に影響された武豊町ウスガイト遺跡や彎曲する丘陵端部の形状に合わせや豊橋市西側遺跡など、具体的な事例は枚挙にいとまがない。内部構造に着目すれば、大形掘立柱建物が単数存在する屋敷2Cイ類、小形から中形の掘立柱建物を中心に複数の建物で構成される屋敷2Cウ類、小形から中形の掘立柱建物が単数存在する屋敷2Cエ類、建物を有さないものなどがあり、これらは一つの集落の中に混在する場合が多い。さらに、区画施設が明瞭に確認できない屋敷2D類は12～13世紀に位置付けられる集落で目立つ。このタイプは調査区の制約でこの種に分類されてしまうものも多いと推察されるが、幸田町牛ノ松遺跡や豊田市栗狭間遺跡などのように丘陵地や山腹などで狭小な平坦面しか確保できない集落遺跡でよくみられる。この他に、岡崎市西野牧遺跡のように比較的大規模な区画の内部に建物群の集中部を見出せる事例がある。西牧野遺跡での建物群の集中部を屋敷と推定するならば、屋敷を圍繞する施設が2種存在し使い分けが行われていることも考えられる。

(4) 町屋【屋敷3類】

奥行きが間口の2倍以上の長方形となる屋敷3類は、古くても14世紀にならないと出現しないタイプである。一宮市馬引横手遺跡では、南北道路に面する形で東西に細長い屋敷が並ぶ集落形態が確認されており、近在する法圓寺に関連する門前集落の可能性がある。寺院門前の集落と位置付けられる豊橋市西側遺跡でも形状はいびつだが屋敷3類が並ぶ状態が確認された。矢作川に面する豊田市古城遺跡では15世紀前葉の屋敷3類が想定されるが、これは河川交通に関わる集落とみることができる。しかし、屋敷3類の最も典型的な事例は、16世紀後葉に成立する小牧山城の城下の遺跡群（上御園遺跡など）と清洲城下町遺跡の短冊型地割を呈して並ぶ町屋と推定される屋敷群でみることができる。この屋敷の形態はその後の江戸時代においても、名古屋や吉田の各城下町（幅下遺跡・吉田城遺跡）のほかに清須宿や荻安賀遺跡などのように宿場町に関わる遺跡でも確認される。

(5) その他の事例【屋敷4類】

以上3類の屋敷にあてはまらないタイプとして、建物跡や土坑などの遺構群が繰り返し構築されしかも区画施設や一定の区画を認識しがたい事例がある。下津宿遺跡の東半部では長方形土坑を伴う小形掘立柱建物が多数検出されたが、これらが連続的に密集し屋敷割を想定することが難しい事例である。こうした事例は清須や下津などの拠点的な集落の周縁部で確認される場合があり、筆者は屋敷3類が成立できなかった町場の遺構ではないかと評価している。このタイプは屋敷そのものとは言いがたいが、ここでは便宜上屋敷4類と分類しておく。また、豊田市水入遺跡のように掘立柱建物が区画を持たずに多数散在するものもあり、その実態を把握しがたい事例もある。

4. 集落遺跡の分類と変遷

(1) 集落遺跡の分類

次に集落遺跡の分類を試みる。屋敷が複数集合して成立する中世集落は、屋敷の組み合わせや集落の規模などから以下の7類に大別できる（図2）。なお、今回は前稿（鈴木2017a）とは分類を若干変更している。

集落1類：大型の屋敷1類を中心に屋敷2類が展開するタイプである。集落1類は屋敷3類や4類を全く伴わないもの（集落1A類）、屋敷4類を伴うもの（屋敷1B類）、1本の道路に面する形で屋敷3類を伴うもの（集落1C類）、屋敷3類が展開する長方形街区が複数伴うもの（集落1D類）に区分される。集落1A類は明確にいうことはできないが刈谷市中条遺跡を中心とする遺跡群、屋敷1B類は下津宿遺跡など、集落1C類は明確にいうことはできないが法圓寺と馬引横手遺跡の遺構群、集落1D類は小牧城下町を構成する遺跡群などが該当する。

集落2類：一般的な屋敷2類を中心に構成されるタイプである。集落1類と同様に、突出した規模や内部構造の特徴を持つ屋敷が1区画確認される事例が多く、これを集落2A類と分類しておく。一方、突出した規模や内部構造の特徴を持つ屋敷が2区画以上確認される事例を集

落2 B類とし、豊田市郷上遺跡など大規模に発掘調査された事例に多くみられる。これに対し、突出した規模や内部構造の特徴を持つ屋敷が存在しない事例も散見される。単純に調査範囲の制約で検出されていない可能性も考えられるが、これを集落2 C類としておく。清須市土田遺跡などがこれに該当する。

(2) 集落遺跡の変遷

実際の集落遺跡は、各地域の特有な地形的・歴史的な条件にあわせ多様な形で組み合わさって地域社会を形成し変遷している。それでも愛知県下の集落遺跡では共通する特徴をいくつか見出すことができ、特に集落の形状が変化する時期は、12世紀前後の集落の成立段階、13世紀末から14世紀の集落の動態が見えにくくなる段階、15世紀後葉前後の防御施設を有する屋敷が目立つ集落の成立段階、16世紀後葉以降の都市化する集落が出現する段階の4つに画期が集約される。

中世前期の集落は、拠点的な集落遺跡で11世紀の資料が確認されるものの、多くの集落遺跡は12世紀から13世紀前葉に成立している。多くは集落2類に属しており、刈谷市中条遺跡や清洲城下町遺跡朝日西地区などのように集落1 A類が若干存在する。

中世中期の集落は、多くの窯業生産地で山茶碗を生産しなくなる段階であるため、集落の動向が把握しにくい。清須市土田遺跡などのように14世紀前葉に消滅したと考えられるものや、あま市阿弥陀寺遺跡などのように14世紀前葉から屋敷が展開するものがあり、一つの画期を形成しているのは間違いない。集落形態はおおむね中世前期と様相は変わらないが、稲沢市下津宿遺跡のように遺構と遺物が密集する区域(屋敷4類)が展開するもの(集落1 B類)や、一宮市馬引横手遺跡と豊田市古城遺跡のように細長い屋敷3類が並ぶもの(集落1 C類)が確認される点が異なっている。津島市本町5丁目遺跡(津島湊関連遺跡)も同様な性格を持つものと想像され、集落1 C類は寺社に付随する事例が多いと考えられる。

中世後期の集落では、新規に集落遺跡が形成される場合が多く、その形状も堀を有する屋敷(屋敷A類)が急増するという特徴がある。屋

敷1 A類および屋敷2 A類は館城(居館)と評価されることが多く、相対的に大型の屋敷A類は地域の中核を形成している。ただし、豊田市郷上遺跡や今町遺跡のように、集落内に突出した屋敷を持たない集落でも、堀状の遺構で屋敷を囲繞する場合があります。堀などの防御施設のみで城郭と評価することは難しい。むしろ、どの集落遺跡でも堀などの防御施設を持ち得る時代背景を重視した方が適切であろう。もちろん、清洲城下町遺跡本町西部地区のように屋敷4類を伴う集落1 B類や清洲城下町遺跡神明町地区のように道路に面した屋敷3類を伴う集落1 C類も引き続きみられる。そして、16世紀第3四半期にこれらが発展する形で広範囲にわたって長方形区画内に屋敷3類が展開する集落1 D類が出現した。小牧市上御園遺跡など小牧城下町に関わる遺跡群に始まり、次いで清洲城下町遺跡につながっている。

5. 小牧城下町とその周辺集落の地割

(1) 小牧城下町の成立過程の仮説

このように中世後期前半までの尾張の中世集落は、概略方格地割に土地を区分して屋敷が展開する形で発展しており、その一方で、町場は街道や岸に沿って屋敷を持たない形か、間口の狭い短冊型地割の屋敷(町屋)が線的に広がるものであったといえる。そうした状況を踏まえ、かつて筆者は長方形街区に展開する短冊型地割の町屋が成立した小牧城下町は、道路に面する設置原理を持つ町場を概略方格地割の内部に取り込んだものと仮説を提示したことがある(鈴木2017b)。つまり、交通路に接続すべき町場を、概略方格地割の中に落とし込み面的に展開させたものと理解したのである。

ここではこの仮説の妥当性を地割の類似性の側面から検証してみたいと思う。

(2) 小牧城下町の構造

まず、小牧城下町の地割を整理しておく。小牧城下町の研究は千田嘉博の研究(千田1989)から始まる。千田は地籍図と江戸時代の春日井郡小牧村絵図などを使用し、長方形街区が展開する小牧城下町の東部に武家屋敷や寺町、西部に職能別の両側町としての町屋が展開すると理

解した。その後小牧市教育委員会による発掘調査の結果、千田が予測した城下町の遺構が実在し織田信長段階にこれらが構築されたことが明らかになった（中嶋 2008 他）。

小牧城下町は小牧山南部に広がる洪積台地上に所在し、西側が五条川に侵食された段丘崖となる。南側と東側は緩やかに地形が下がり明瞭な境界をなさないが、総構えが構築された可能性も指摘される（小野 2014）。東西約 1km、南北約 1.3km の範囲に東西方向に 5 本南北方向に 4 本の道路が設置されて 7 区画以上の長方形街区が設定された。西端の南北路（御園筋）と並行する南北路（紺屋町筋）は南北に突き抜けるが、東側の鍛冶屋町筋と新町筋は北端を東西道路、南端を総構えによって遮断されている（図 3）。

発掘調査は小牧池田遺跡と上御園遺跡と新町遺跡で実施されている。小牧池田遺跡は小牧山城大手道正面に所在する遺跡で、小牧市役所庁舎建設に伴う発掘調査が行われた（図 4）。調査の結果、小牧山城大手道から西に約 10m の位置で側溝を伴う幅が約 2.4m の南北道路が検

出された。これは山城大手道から連続する城下町側の大手道と推定されるが、直線的につながらない配置であるため、接続部で虎口状の空間が存在した可能性も考えられる。城下町側の大手道の両側には該期の遺構があまり展開していないことから、大手広場的な空間があったことが指摘されている（小野 2014）。一方、調査区南部では東西方向に井戸が配列する状態で検出されており、その南に所在する東西道路に面する短冊型地割の町屋が展開したと思われる。各井戸間の距離は約 6.6m、約 7.8m、約 15.0m 離れており、7.5m 前後の間口を呈する町屋敷が並んでいたと推定される。多くの遺構の時期は明らかにされていないが、第 2 次調査 A 区 SE01 は永禄期（下っても天正期）と評価されているので、織田信長期の東西方向に並ぶ短冊型地割の町屋が存在したといえる。

上御園遺跡は小牧山の南西 300 ～ 500m の位置にあり、地籍図によれば東西約 120m、南北約 180m の長方形街区が展開する部分である。区画整理事業に伴い道路部分の発掘調査が実施され、町屋の詳細な構造が明らかになっ

ている（図 5）。鍛冶屋町筋の街路の西側溝 SD3-036,037 と東側溝 SD3-038,039 が検出され、紺屋町筋との中間点に位置する区画溝との距離は約 62m、新町筋との中間点に位置する区画溝 SD3-052 との距離は約 65m を測る。SD3-052 をはじめとするこの区画溝は町屋の背割り線と推定され、街路に近い 30 ～ 35m の区域は遺構の濃密な部分、区画溝に近い区域は遺構が希薄な部分となることが判明している。中嶋隆は、紺屋町東側は奥行 55 ～ 65m、鍛冶屋町

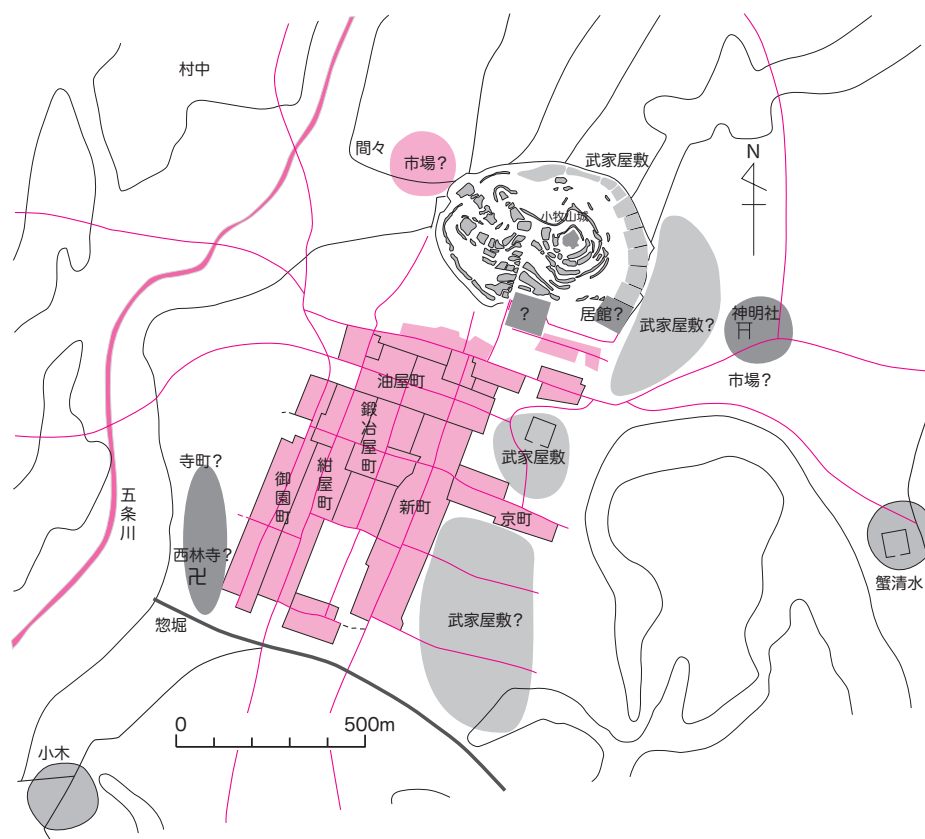


図3 小牧山城と小牧城下町の景観復元案（鈴木 2014 を改変）

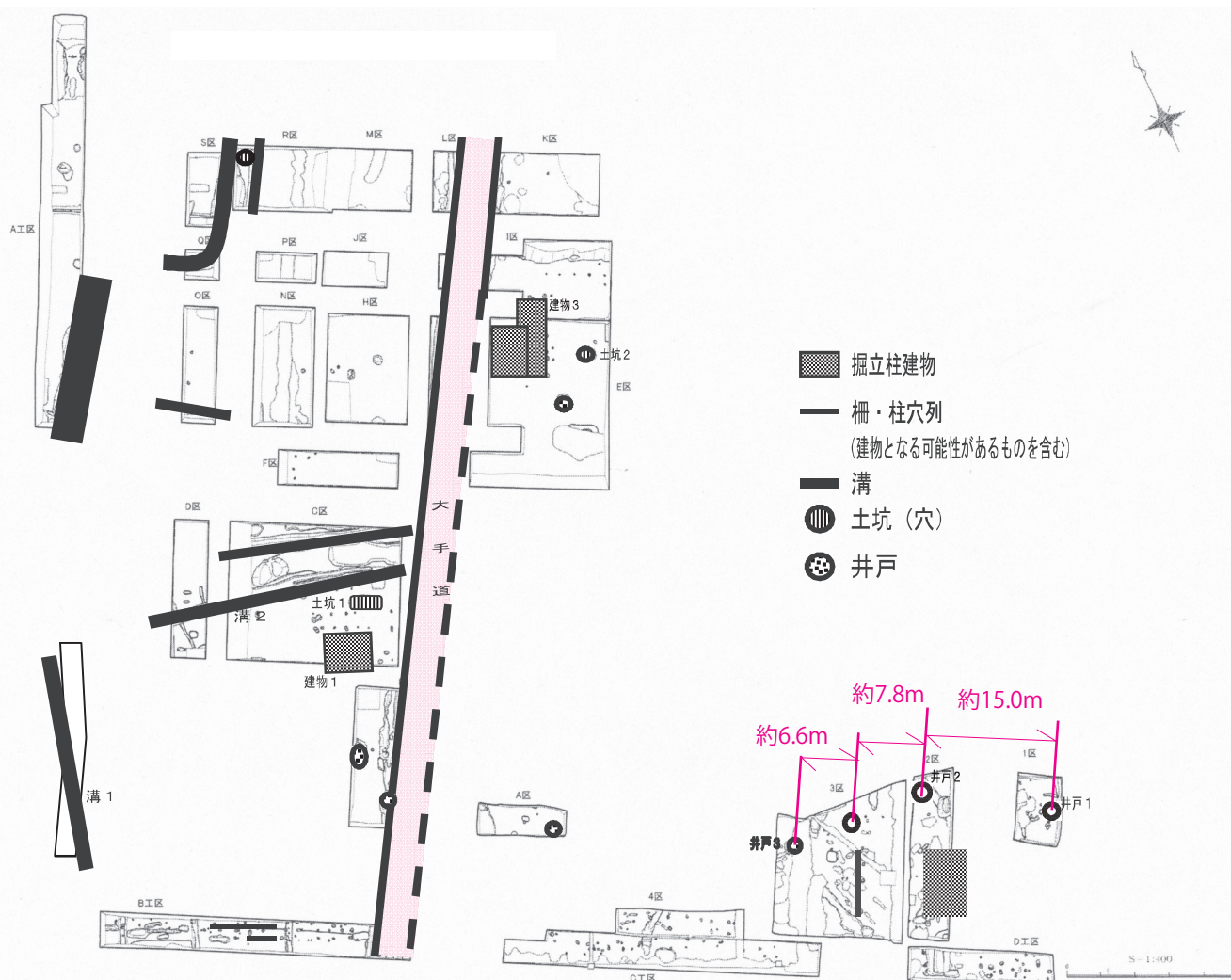


図4 小牧池田遺跡の遺構図と地割の復元案（小野 2014 を加筆し改変）

西側は奥行約 55m、鍛冶屋町東側は奥行 60 ～ 65m、新町西側は奥行約 60m と整理した（中嶋 2008）。町屋の地割境の区画施設はほとんど検出されておらず正確な間口の規模は不明であるが、中嶋は街路に沿う建物規模から間口が 6 ～ 7m と推定した。これについては再検討の余地がある。紺屋町東側では推定紺屋町筋から約 25m 東の位置に井戸が概略南北方向に 9 基並ぶ形で検出され、各井戸の南北方向の距離は北から順に、約 7.4m、約 2.6m、約 8.4m、約 7.6m、約 8.2m、約 7.1m、約 7.9m、約 9.4m となり、大部分の井戸は 7.1m から 8.2m の間隔で配置されたことがわかる。同様に掘立柱建物については、推定紺屋町筋から約 5m 東の位置に東西方向に長い建物が配置され、その中心軸の南北方向の距離を北から順に計測すると、約 8.6m、約 6.3m、約 26.3m（約 8.8m × 3）、約 7.4m、約 7.3m、約 9.1m となっている。掘

立柱建物は良好に検出されていない部分や、建物と井戸の配置が必ずしもうまく対応しない部分もあり、江戸時代前期まで遺構（屋敷）が継続したことを考慮するとさらなる詳細な検討が必要はあるだろう。しかし、以上の検討結果から、紺屋町東側の町屋の間口は 7 ～ 9m 前後と評価した方が適切と思われる。

最後に新町遺跡について検討する。新町遺跡は小牧山の南 300 ～ 500m の位置にあり北端の東西街路と京町の東西街路の間に位置する。小牧中学校建設に伴う発掘調査が実施され、堀で囲まれた方形区画が確認された。東西約 45m、南北約 35m の規模を持つ。長方形街区が展開する部分である。

（3）前期清須城下町の地割

次に、小牧山城が建設される前の織田信長が在した拠点である前期清須城を検討する。前期清須城の構造は、二重堀で圍繞された守護館を

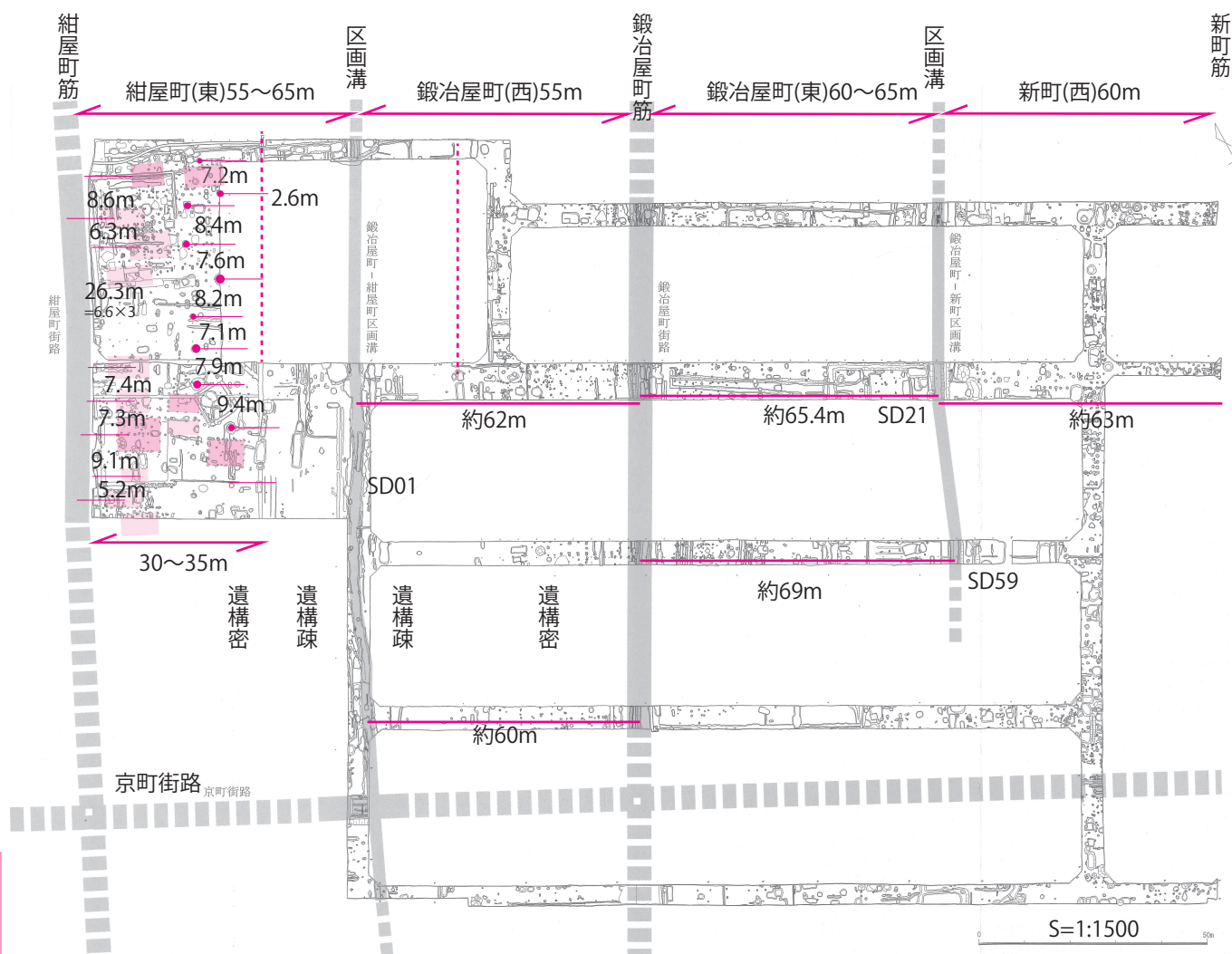


図5 上御園遺跡の遺構図と地割の復元案（小牧市教育委員会 2008 を加筆し改変）

中心に堀で囲まれた方形武家屋敷が展開する部分と、その周縁部に神社を中心に市などの町場が展開する二元的な構造であったと評されている。守護館は幅約 8m、深さ約 2m の堀で囲まれており、内堀が概略 100m 四方、外堀が概略 200m 四方と推定されるが、発掘調査事例が少なく平面的な規模の特定には至っていない。

一方、守護館南側に展開する方形武家屋敷域は幅が 3～6m の堀が多数検出されており、ある程度規模を特定できる事例もある（図 6）。田中町地区では区画 0001～0007 が確認されており、区画 0003 の南北方向の溝心心間距離は約 46m、区画 0004 の南北方向の溝心心間距離は約 49m、区画 0004 の東西方向の溝心心間距離は約 45m、区画 0007 の南北方向の推定溝心心間距離は約 71m となる。本町西部地区では区画 6002 の南北方向の距離（SD6018 中心軸と SD6023-SD6025 間道

路中心軸の距離）は約 25m、区画 6003 の南北方向の距離（SD6023-SD6025 間道路中心軸と SD6048 中心軸の距離）は約 44.5m、区画 6005 の南北方向の溝心心間距離は約 48m となる（溝 SD6025 を考慮せず各区画溝心心間距離で測定すると南北方向の距離は区画 6002 が約 21.5m、区画 6003 が約 48m、区画 6005 が約 48m となる）。このように方形武家屋敷域は概ね 45m 間隔で地割が形成されていたと推定される。

前期清須城では短冊型地割の町屋は事例が少なく、城下町期Ⅱ期の神明町地区で御園市場が廃絶したのちにできた道路（萩原迄道）に面する町屋（屋敷 3 類）が存在する程度である。ここは御園神明社の門前に相当しかつ街道に面する部分で形成された短冊型地割の町屋で、道路推定地から約 35m 西の地点で井戸が 4 基（Ⅱ SE23～27）確認されている。各井戸の南北方向の距離を北から順に計測すれば、約 8.2m、

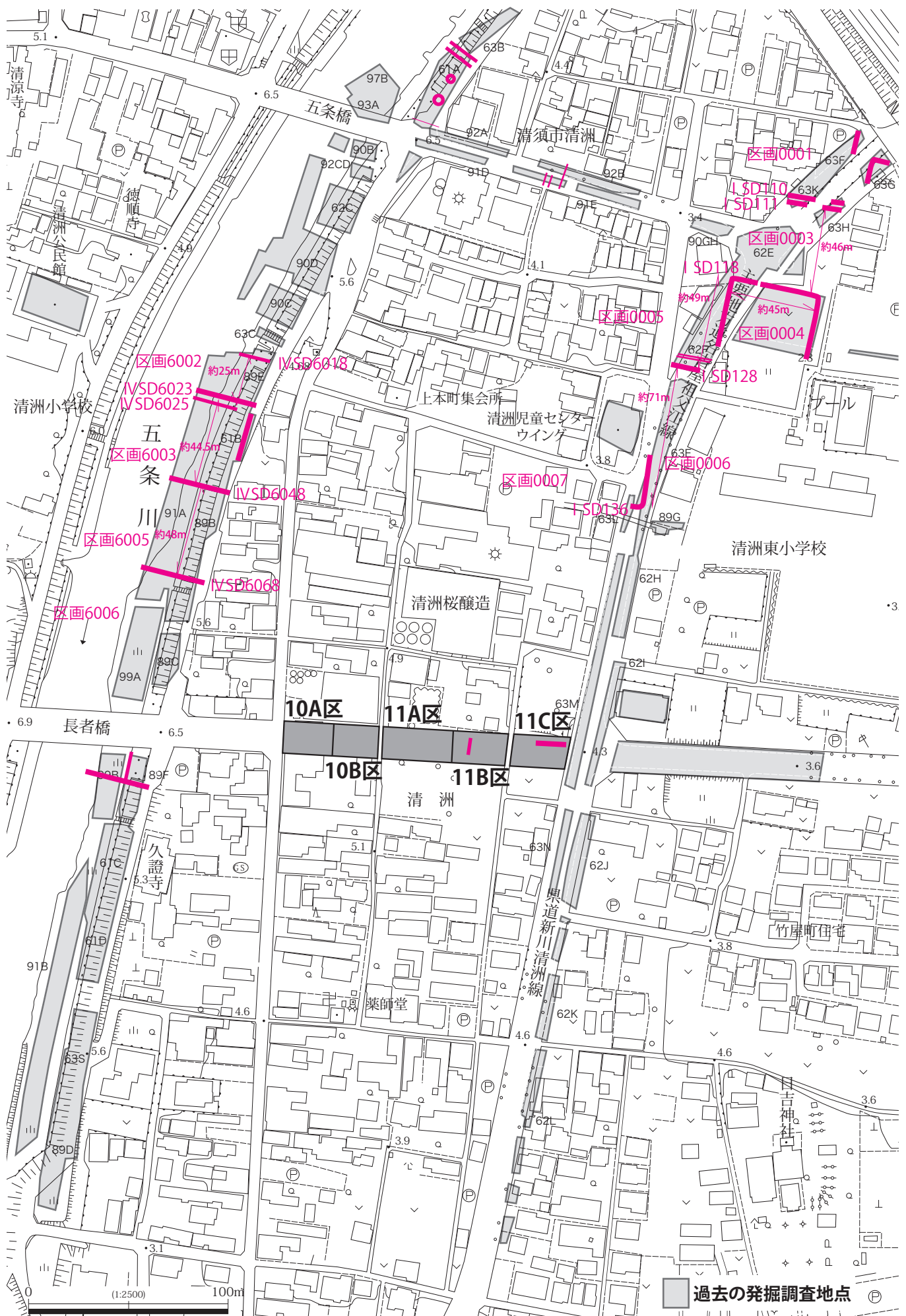


図6 清洲城下町遺跡の城下町前期の遺構図と地割（愛知県埋蔵文化財センター2013を加筆し改変）

約 4.5m、約 5.8m、約 6.3m となり、大部分の井戸は概ね 6m の間隔で配置されたことがわかる。

なお、清須城と同等の位置づけにある岩倉城では居館と五条川の対岸にある堀で囲まれた屋敷が確認されているが、これ以外に武家屋敷や町屋の遺構を発掘調査で確認されておらず、今回の検討からは除外した。

（４）小牧城下町以前の屋敷 3 類

前項で前期清須城に伴う屋敷 3 類を検討したが、中世中期に出現する屋敷 3 類の事例としては、尾張では他に馬引横手遺跡の事例がある。法圓寺の門前に位置する集落遺跡で、南北道路に面して東西方向に細長い屋敷が並ぶ屋敷群が確認された（図 7）。発掘調査では東西方向のあまり規模が大きくない溝が多数検出された。多くは 2 本一対で確認されており、その溝間の細長い空間が屋敷境と想定すると、推定道路の東側で北から順に計測すれば、約 22m、約 84m、約 26m、約 26m、約 33m、約 34m となる。また、道路の西側では溝の端部から端部の区画距離を北から順に計測すれば、約 15m、約 15m、約 30m、約 12m、約 15m となる。復元的に屋敷割りを整理すると、間口が西側は 12m、15m、21m、東側は 21m、26m、33m の間隔で配置されたことがわかる。なお、馬引横手遺跡の事例は 2 本一対の溝で挟まれた細長い道路状の空間が屋敷境となっており、16 世紀中頃の清洲城下町遺跡と上御園遺跡とは根本的に構造が異なるといえる。

（５）小牧市内の中世集落遺跡の地割（１）

次に、小牧市内に所在する中世集落遺跡の地割を検討する。南外山遺跡（南外山北浦遺跡・南外山東浦遺跡・南外山城跡）は小牧市南部に所在する中世集落で、八幡社付近に所在したと言われる南外山城跡を中心に展開した中世集落である。これまでに 42 次以上の発掘調査が小牧市教育委員会によって実施され（図 8）、徐々にその内容が判明しつつある（小野 2017）が、全体の地割は把握できているとはいいがたい。そこですでに公開されている遺構配置図を集積し区画施設（主に溝）を示したのが図 9 である。

南外山城跡と伝来される八幡社周辺の北部地区では、区画溝が複数検出された。これらは南外山城跡と類似すると思われるほぼ正方位と、

北方向で東に 10 ～ 20 度振れる方位の 2 種類の溝に分類でき、前者が八幡社付近に、後者はさらに西側の区域に分布している。前者の区域では南外山城跡北堀との溝心心間距離が 41 次 SD03 で約 25m、21 次 SD01 で約 55m となる。21 次調査で検出された方形区画は約 8m と狭い。一方、西側では東西方向の溝心心間距離は約 12m、約 24m、南北方向で 24m の数値が計算された。

南外山公園付近の南部地区でも区画溝が複数検出され、東部では道路側溝と思われる溝も確認された。公園部分では南北方向の溝心心間距離は約 55m、東西方向の溝心心間距離は約 45m を測り、その東側では南北方向の道路心心間距離は約 33m、東西方向の道路心心間距離は約 37m を測る。

（６）小牧市内の中世集落遺跡の地割（２）

中宮遺跡は小牧市南部にある大字小針に所在する集落遺跡で、先に紹介した南外山遺跡の西側約 1.2km に位置する。名古屋空港周辺環境整備対策事業に伴い発掘調査が小牧市教育委員会によって実施され、中近世集落の一部が明らかとなった。中世（Ⅰ期）では前半（13 ～ 14 世紀）と後半（15 ～ 16 世紀）に区分されるが、集落そのものは 15 世紀後葉にはいったん途切れてしまうようである。

北地区と南地区で調査が実施されており、区画溝が複数検出された。このうち、南地区では概ね東西方向に走る溝が 3 か所に繰り返し掘削された状態が確認されており（図 10）、特定時期の区画の規模を正確に割り出すことは難しい。それでも、SD07 と SD44 の溝心心間距離は約 35m、SD44 と SD65 の溝心心間距離は約 19m と計測され、この両者を合わせると約 54m となる。およその区画規模の傾向を知ることができる。

（７）小牧市内の中世集落遺跡の地割（３）

内方前遺跡は小牧市南部に所在する中世集落遺跡で、南外山遺跡の北側約 0.4km に位置する。これまで何度か発掘調査が小牧市教育委員会によって実施されているが、ここでは緊急地域雇用特別基金事業に伴う調査の成果を検討対象とする（図 11）。中世集落に伴う溝は大きく蛇行するものが多いが、大きくみれば東西およ

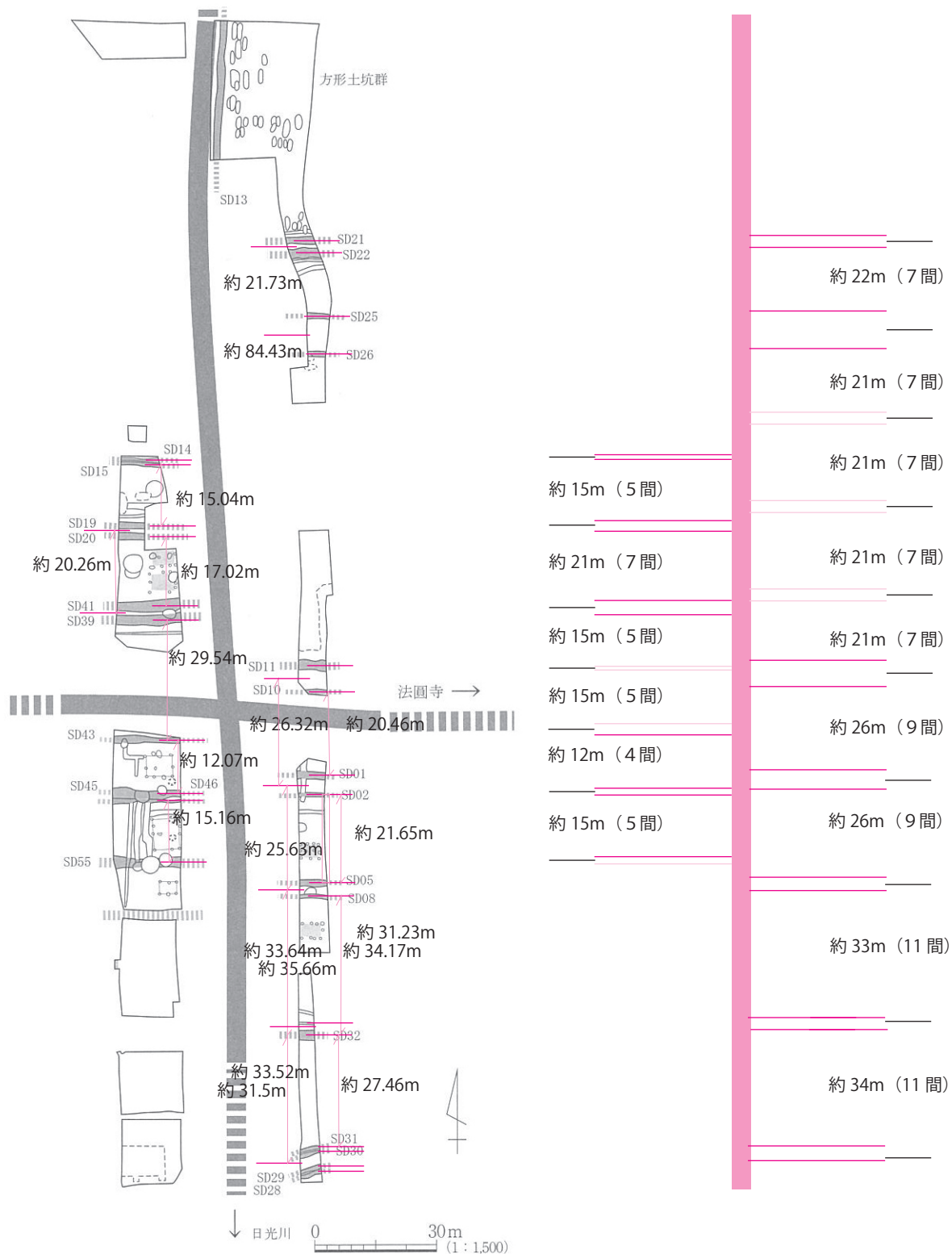


図 7 馬引横手遺跡の遺構図と地割の復元案 (愛知県埋蔵文化財センター 1999 を加筆し改変)

び南北方向に設定されたことを読み取ることができる。13～14 世紀に属する溝が多いが、SD33 などのように 16 世紀に位置付けられる

ものもある。

区画溝は大きく蛇行するために地割の規模は特定し難いが、25m 前後の規模を測定する

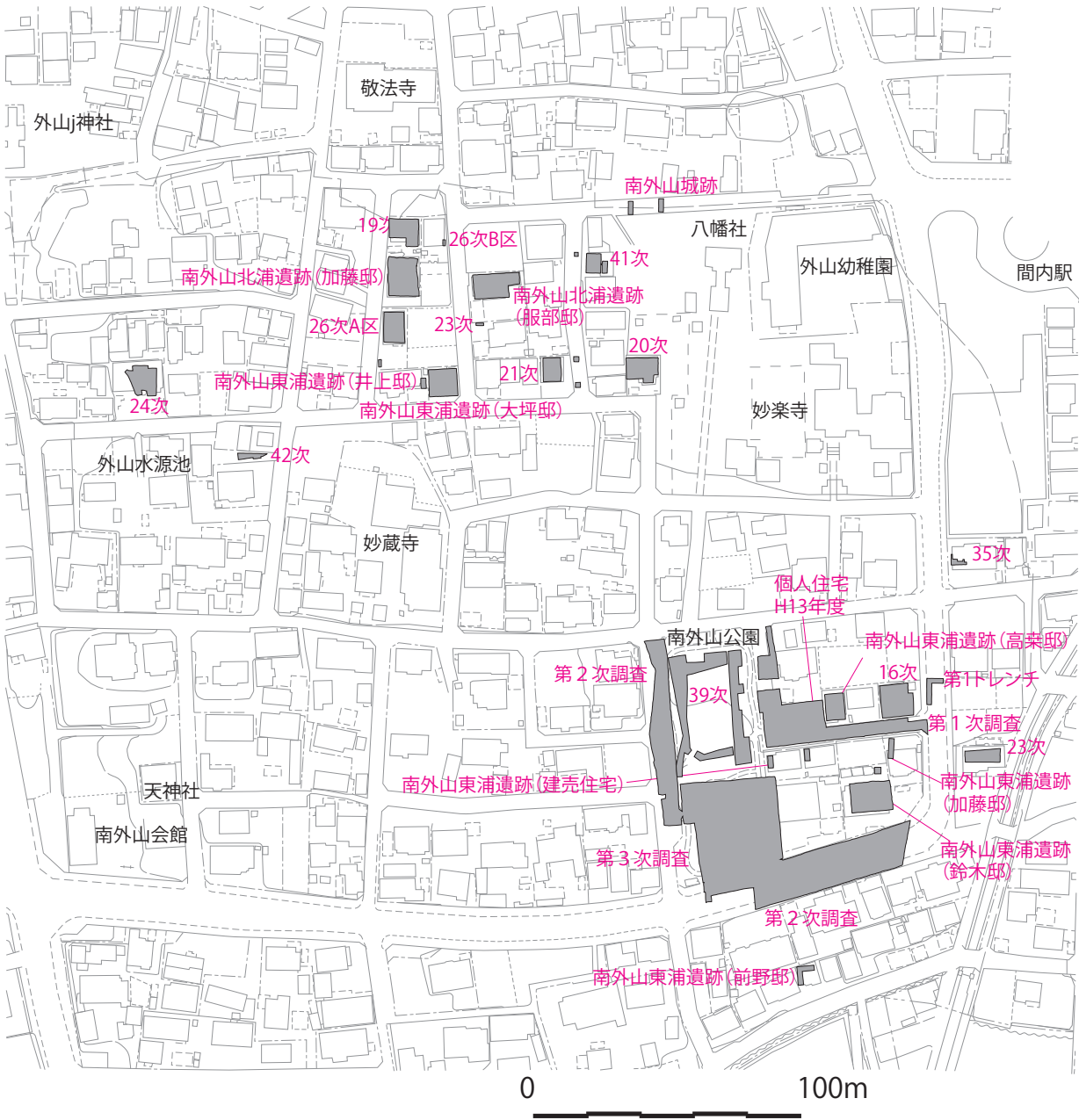


図8 南外山遺跡の調査区配置図（小牧市教育委員会発行報告書を編集し改変）

部分が目立つ。また、南北方向を比較的直線状に貫く SD03 に対となる可能性がある SD01 と SD35 などとの溝心心間距離はそれぞれ約 15m、約 60m となっている。

6. 地割から見る小牧城下町の成立

上記のように各遺跡の地割を検討した結果、以下の特徴を読み取ることができる。

まず、屋敷2類は遺跡や地点によりその平面

規模はバラバラで統一されておらず、特定の傾向を読み取ることが難しいと思われる。また、屋敷3類も15世紀の馬引横手遺跡と16世紀中頃の清洲城下町遺跡・上御園遺跡では間口の規模が大きく異なっており、その間に関連性は認められない。

しかし、その中であっても上御園遺跡で確認された奥行 55 ～ 65m の区画規模については近隣の南外山遺跡で類例（南外山公園地点で検出された南北方向の規模や南外山城跡北堀に関

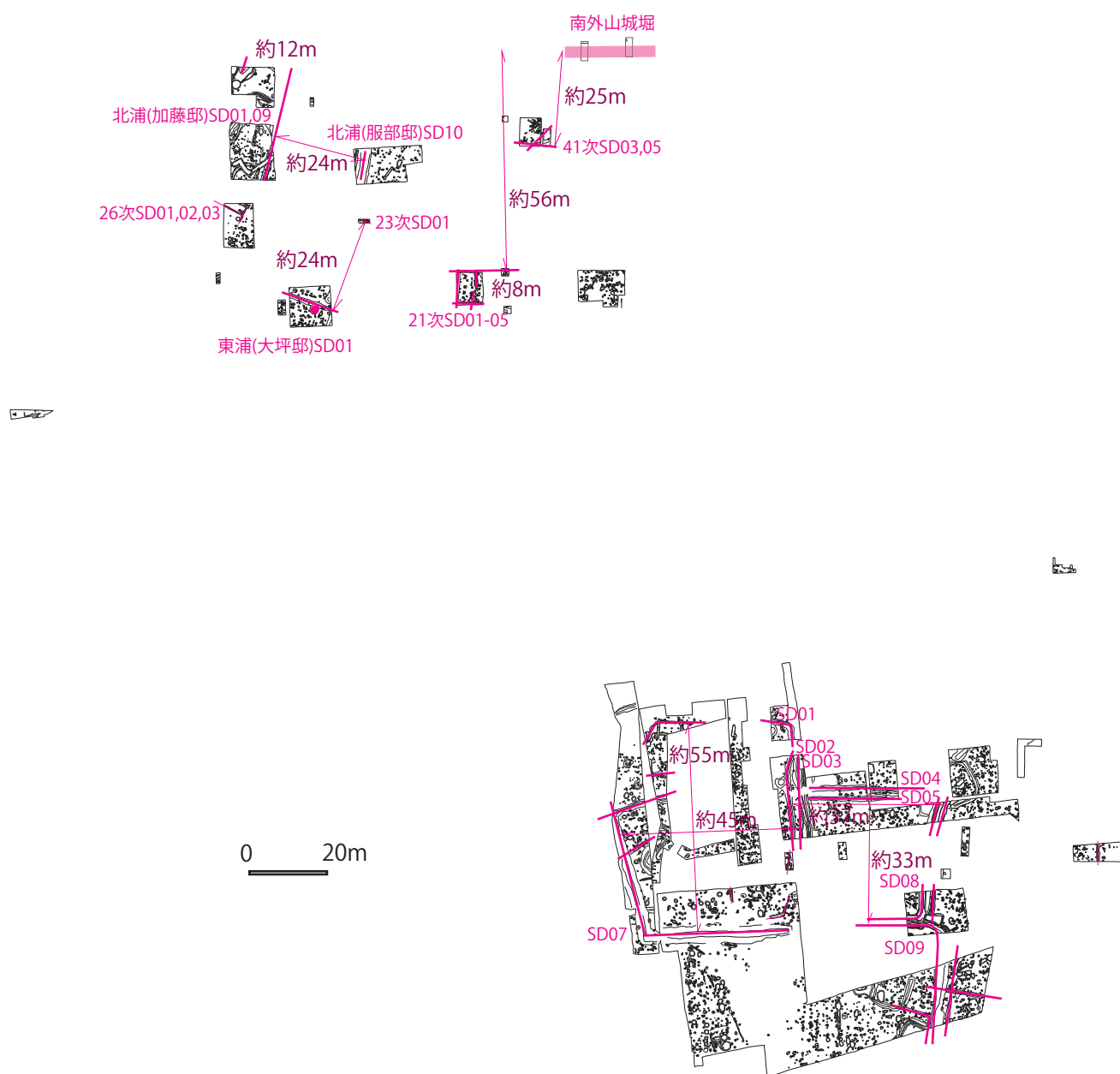


図9 南外山遺跡の遺構図と地割の復元（小牧市教育委員会発行報告書を編集し改変）

連する南北方向の規模）を見出すことができる。また、近隣の中宮遺跡や内方前遺跡でも約54mや約60mの数値を検出することができた。これらは、東西約120m、南北約180mの規模を持つ長方形街区とは直接結びつかないものであり、たまたま数値が合致したに過ぎないかもしれないが、何らかの関連があった可能性を指摘されてもよいだろう。一方、屋敷3類については、清洲城下町遺跡神明町地区の間口と上御園遺跡の間口は同一ではないが、15世紀の馬

引横手遺跡よりは近似しており、上御園遺跡の遺構配置は清洲城下町遺跡神明町地区の片側町の短冊型地割の影響を受けた可能性が考えられよう。

以上の結果、上御園遺跡で確認された地割は、街区の規模は近隣の集落遺跡の地割、屋敷3類の間口は小牧山城築城直前に展開した前期清須城下町の町屋の地割、の二者の影響を受けた可能性が考えられる。これはすなわち小牧山近在の集落遺跡の地区割と移転元に存在した屋

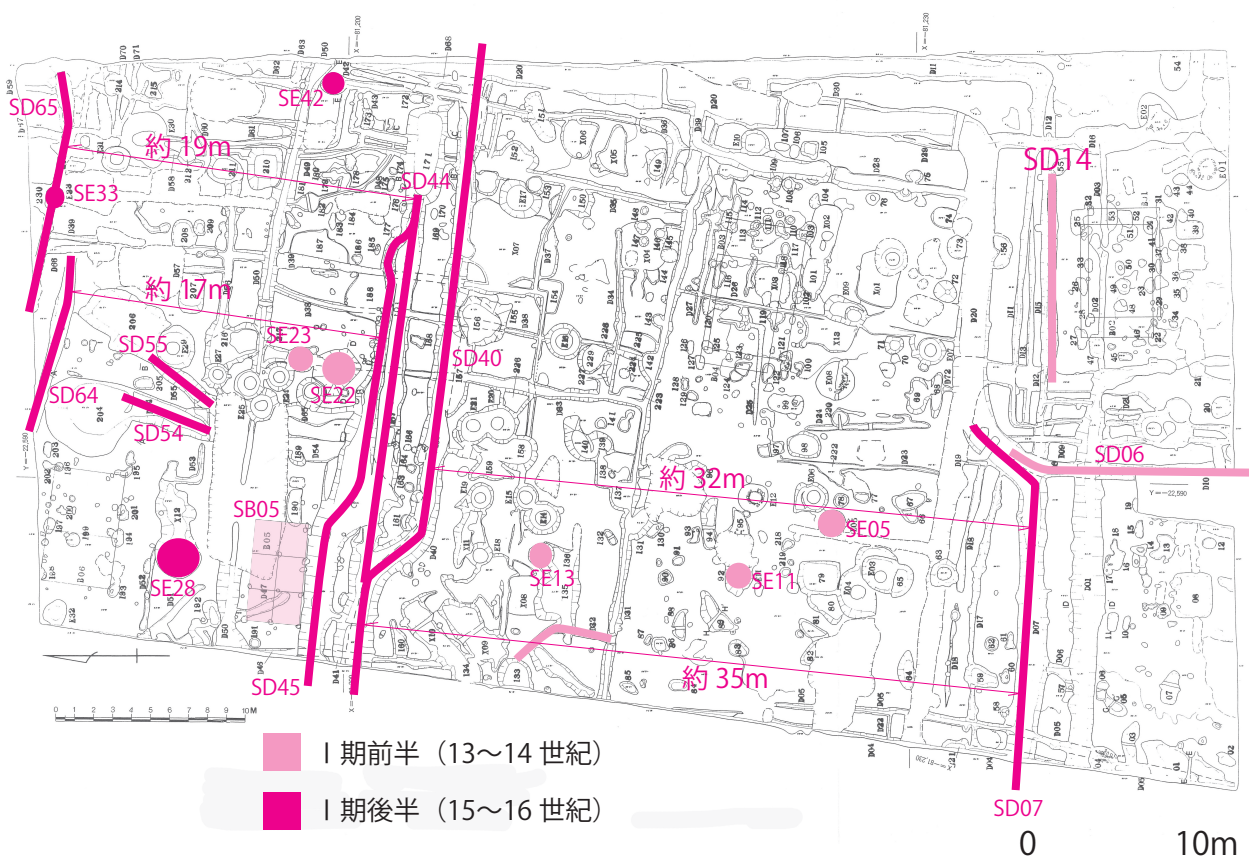


図10 中宮遺跡(南地区)の遺構図と地割の復元(小牧市教育委員会1994を加筆し改変)

敷割を合体させたものであった可能性を意味しているであろう。

7. まとめ

尾張の集落遺跡では中世初期での屋敷の普及が大きな画期となっており、その構造は広大な沖積地の土地を区分するためにおおよその方格地割を形成して屋敷が展開するのが通例であった。そして、守護所清須や岩倉のような拠点的な集落では地割は直線的に区分され、権力者の規制が強く感じられるものとなっている。そのような背景をもとに小牧をみると、(1) 山上に中心区画をもつこと、(2) 山麓の武家屋敷は方格地割にはならないこと、(3) 自然河川を全く取り込もうとしないことなど重要な部分で異質な特徴を持っていることがわかる。特に、(2) 山麓の武家屋敷は、山下に家臣団を従属させた屋敷の配置としてみれば自然発生的なものとして理解できるが、従来の尾張の集落遺跡の伝統には全く依拠しないものといえる。

同様に、小牧城下町は、概略方格地割に土地を区分して屋敷を配置する形と、街道や岸に沿って線的に広がる町場との設置原理の異なるものを組み合わせたものであった可能性を指摘することができた。このことは、織田信長が武家の集落内部に構造を伴う形で町場を取り込んだものとして画期的であったと換言することもできよう。

このように、織田信長は旧来からある集落構造に依らず、居館—武家屋敷と寺社—町場の二元的な構造を打破し、居館を中心に城下に欲しいパーツを集め小牧の立地に合わせて組み合わせた結果できたものであるように思われる。その結果が、方格地割にはならない山麓の弧状に配列する武家屋敷であり、長方形街区と短冊型地割を組み合わせた町屋であった。小牧城下町の規模や構造が、後の時代からみると洗練されていない形状にみえることは、まさにその場で組み合わせてできたことを示しているのではないだろうか。

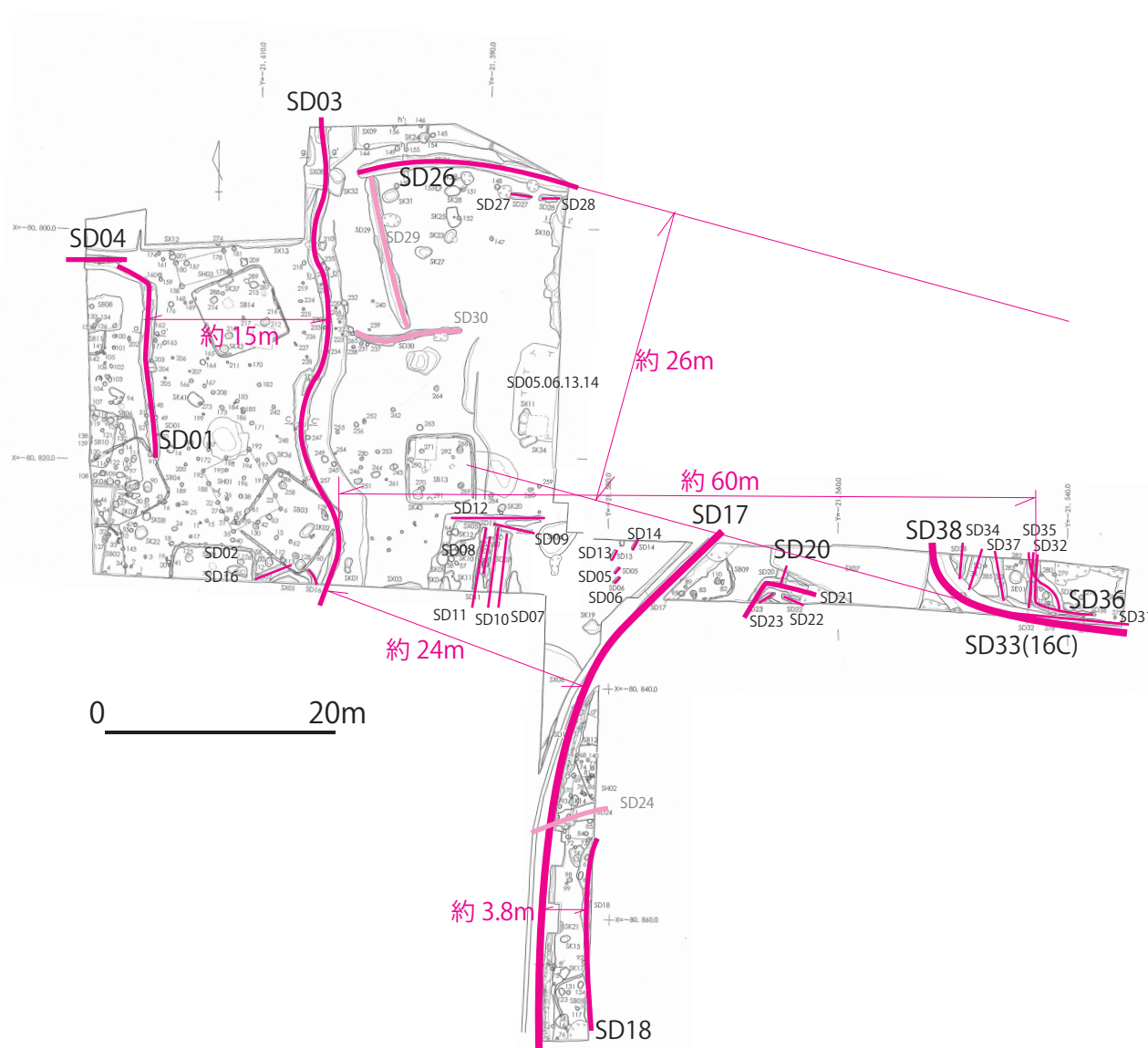


図 11 内方前遺跡の遺構図と地割の復元（小牧市教育委員会 2003a を加筆し改変）

引用・参考文献

- 小野友記子 2014 「小牧山城と小牧城下町」『新・清須会議』資料集 新・清須会議実行委員会
- 小野友記子 2017 「南外山遺跡」『愛知県史資料編 5 考古 5 鎌倉～江戸』愛知県
- 鈴木正貴 2014 「尾張からの問題提起—尾張守護所の変遷からみた研究課題—」『新・清須会議』資料集 新・清須会議実行委員会
- 鈴木正貴 2015 「郷土遺跡の再検討—掘立柱建物跡の復元を中心に」『豊田市史研究』第 6 号 豊田市
- 鈴木正貴 2016a 「室遺跡の再検討—掘立柱建物跡の復元を中心に」『西尾市史研究』第 2 号 西尾市
- 鈴木正貴 2016b 「西三河における中世集落の成立と展開」『研究紀要』第 17 号愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 2017a 「集落の変遷と都市」『愛知県史資料編 5 考古 5 鎌倉～江戸』愛知県
- 鈴木正貴 2017b 「中世集落の変遷からみる城下町の形成—愛知県下の考古学的調査から—」『「城下町科研」総括シンポジウム 1 @京都 中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究』「城下町科研」事務局
- 千田嘉博 1989 「小牧城下町の復元的考察」『ヒストリア』123 号 大阪歴史学会
- 中嶋隆 2008 「小牧城下町」『信長の城下町』高志書院

【図版に伴う引用・参考文献】 上述以外

- 愛知県埋蔵文化財センター 1990 『清洲城下町遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 17 集
- 愛知県埋蔵文化財センター 1994a 『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 50 集
- 愛知県埋蔵文化財センター 1994b 『清洲城下町遺跡Ⅳ』 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 53 集
- 愛知県埋蔵文化財センター 1999 『馬引横手遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 84 集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2002 『清洲城下町遺跡Ⅶ』 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 99 集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2013 『清洲城下町遺跡Ⅺ』 愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 183 集
- 国際文化財株式会社 2013 『清洲城下町遺跡Ⅴ』 清須市埋蔵文化財調査報告 5
- 小牧市教育委員会 1994 『愛知県小牧市中宮遺跡発掘調査報告書』
- 小牧市教育委員会 1998 『愛知県小牧市小牧城下町発掘調査報告書―新町遺跡―』
- 小牧市教育委員会 2002 『愛知県小牧市内方前遺跡発掘調査報告書』
- 小牧市教育委員会 2003a 『愛知県小牧市内方前遺跡発掘調査報告書 2』
- 小牧市教育委員会 2003b 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（XⅡ）南外山北浦遺跡・南外山東浦遺跡・柏瀬遺跡・東田中宮前遺跡・南新田遺跡・辻ノ内遺跡・下末地内試掘』
- 小牧市教育委員会 2004 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（XⅢ）上御園遺跡・南外山東浦遺跡・南外山城跡・南新田遺跡・竹林遺跡・諏訪塚遺跡・向山遺跡』
- 小牧市教育委員会 2005 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（XⅣ）柏瀬遺跡・池田遺跡・南外山東浦遺跡』
- 小牧市教育委員会 2006 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（XⅤ）南外山北浦遺跡・南外山東浦遺跡・牛屋遺跡・東田中宮前遺跡・藤島町居屋敷北遺跡・向山遺跡・新租遺跡・柏瀬遺跡・三ツ瀧宮東遺跡』
- 小牧市教育委員会 2008a 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（XⅥ）南外山遺跡・（仮称）小牧城下町跡・新町遺跡・内方前遺跡・東田中宮前遺跡・半之木原遺跡・高拍子遺跡・市之久田北浦遺跡・松山遺跡』
- 小牧市教育委員会 2008b 『愛知県小牧市上御園遺跡第 3 次発掘調査報告書』
- 小牧市教育委員会 2009a 『小牧池田遺跡第 2 次発掘調査現地説明会資料』
- 小牧市教育委員会 2009b 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（XⅦ）新町遺跡・南外山遺跡・小針入鹿新田中市場遺跡・辻ノ内遺跡』
- 小牧市教育委員会 2009c 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（XⅧ）牛屋遺跡・柏瀬遺跡・南外山遺跡・日塚遺跡・手越・西ノ門遺跡・下末中屋敷遺跡・上針田遺跡』
- 小牧市教育委員会 2013a 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（21）浜井場遺跡・若宮遺跡・南外山遺跡・三ツ瀧・東播州遺跡・高拍子遺跡』
- 小牧市教育委員会 2013b 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（22）南外山遺跡・浄音寺山遺跡・多気神社西遺跡・天王塚遺跡』
- 小牧市教育委員会 2017 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（23）平成 25 年度藤島町居屋敷遺跡・天王塚遺跡・南外山遺跡・竹林遺跡・市之久田養光寺前遺跡・松山遺跡・巾上遺跡・小塚山遺跡 平成 26 年度小牧池田遺跡・新町遺跡・東田中宮前遺跡・竹林遺跡・三ツ瀧宮前遺跡・小牧山東遺跡』
- 小牧市教育委員会 2018 『愛知県小牧市市内遺跡発掘調査報告書（24）平成 27 年度南外山遺跡・市之久田北浦遺跡・内方前遺跡・高根遺跡 平成 28 年度鳥坂遺跡・市之久田北浦遺跡・落合遺跡・東上遺跡・二重堀中屋敷遺跡・片山遺跡』